たのだ。途中の風物など全然目に残っていない。
私らのために命を失くした邵連祥の霊よ安かれ。

坂下分村放浪記

岐阜県　楯　ふさ

十一日の夜、本部に集まって、ソ連が押し寄せてくるの情報に、墳墓の地と定めた七星で全員自決するか、それとも逃げのびるか、の二論に大方は自決のほうに賛成でした。団長吉村さんが死ぬのはそれからのことで、まず落ち延びるの意見にしたがって一家族一台の馬車に、必要な品を積んで七星分村を後にしました。七星を出て、その日にソ連軍の戦車に逢いました。そのときのおそろしさは生涯忘れません。畑に身をかくし、目の前の道にたくさんの戦車がぴたっととまって銃を向けて、なにやらわからぬ言葉でわめくありさまは生きた心地なんてありません。いかに広い畑とはいえ、五百人、しかも幼い子どもの多い集団です。一発の発砲もせず、反対の道を通りすぎていきました。運命の別れ道とはこのことです。原さんの奥様が泣きわめくみどり子を五百人の命ととりかえて北満の包米畑に残してきたのです。

終戦も知らされぬまま、昼間は野山に伏し、夜は暗やみにまぎれてどこへ向っているかも知らずの行軍。なんといっても着のみ着のままの五百人の大世帯、空腹で歩けないありさま。どこかおぼえておりませんが、堀田のおじいさんは石の上にすわりこんで、わしはもうここより絶対に動かんで、みんな先に行ってくれ、とがんとしてきき入れず、山中に一人残してきました。食べる物なんかありません。背に腹はかえられず、愛犬まで食べました。夜になると、満人の畑でとうもろこし、じゃがいもをぬすみに行きました。いくらおとなしい満人でも、たいせつに育てた作物を一夜に荒らされたらだまっていません。満人の銃撃にも逢い、九死に一生を得て逃げのびましたが、ここでも犠牲者を出しました。若い男は兵隊にとられ、残りは老人と女子どもの大世帯です。子どもを二人背負い、両方に子どもの手を引いてあわれな行軍をした方がいく組もありました。飢えと寒さと疲労の

上にシラミのとりこ、人間の歩く姿ではありません。いよいよ食べる物がなくなり、苦楽を共にした愛馬の血の一滴までも一斗かんで煮つめて断腸の思いでわけ合って食べました。ナマのニンジン、ナマのとうもろこしをかじり、幾日放浪してきたか、日日などさっぱりおぼえておりません。

ソ連兵に身につく物みんなはぎとられ、ダバイダバイと追い立てられ、トラックに積みこまれたときは、地獄の穴にほおりこまれていっしょに殺されるかと思っておりました。今度は無蓋車に乗せられて、飢えと寒さの夜中、いずくとも知れないところで止まり、懐中電灯をつきつけられ、墨を入れた大男があらゆる物をはぎとり、娘をさがす形相、あのときのおそろしさを言葉なんかで言いあらわせません。

坂下分村は一人として拉致されず、不幸中のさいわいでした。牡丹江の国民学校にごろ寝をしたとき、校庭一ぱい、アミーバー赤痢の便で歩く所のないありさまでした。老若男女、ほとんどが過労と栄養失調、加えて発疹チフス、一夜明ければ死人ばかり。野辺の凍りついた墓に、かける土すらなく、野犬のえ食でした。

待ちわびて頑張りつづけたかいもなく異国に骨を埋めた二百五十六柱の同胞の無念さに落涙するのみ。

母、長男、長女を琿春の地に

岐阜県　中谷信一

昭和二十年八月九日朝七時、団本部に集合の連絡を受け、行くと、鈴木団長、田中副団長、福島校長が顔青ざめ、先ほど琿春県長より日ソ開戦のため団員、男女青年は軍に協力。老幼婦女子は本日正午までに琿春神社境内に貴重品は持参、軽装で避難するようにと電話で命令後、ぶっつり切れて通じなくなったと。二、三日前に降った雨で川は増水しており、琿春橋は第一、第二橋とも日本に爆破され、渡橋不可能、渡船で渡るも、付近は各開拓団の避難民で殺到し、大混乱をしていた。避難列車の時刻は切迫するし、荷物どころか、貴重品まで置きざりで、体だけが琿春駅にたどりつく。鈴木団長ほか三